2019年8月18日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　主日礼拝 NO.1081
聖　書　　詩編 16：8～11／ローマの信徒への手紙 14：8～9
説　教　　『 分かちがたくキリストと 』

前後の脈絡と切り離され、ふいに御言葉が、すぅっと染み込むことがある。
「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬ。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のもの(ﾛﾏ 14:8)」。
この御言葉、立派すぎて「ああ、そういうことですか」、と頭のどこかに仕舞いっぱなしにしていた。ところが、どういう具合からか、すぅと身体に流れ込んで来た。
初代教会の信徒たちは確かにそのように生き、そのように死んだかもしれない。それが現代の「わたしたち」のことになりえるのか。
いや待てよ、あれ違和感がない。私は利己的で、私のために生き、しかたなしに死ぬ者、だと思っていた、が案外そうでもないのか。いったい何が起こっているのか。

「キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるため(14:9)」。キリストはやがて死ぬ私の主となられ、生きている私の主となっておられる。
私は、キリストの前で、キリストと共に、今「主のために生き、主のために死んでいる(14:8)」。正確には、キリスト〝が〟私の前に立ち、キリスト〝が〟私と共に存在し給う。ゆえに主のために生き、主のために死ぬ。

浄土真宗では無学で敬虔な門徒を「妙好人」と呼ぶが、石見国に下駄職人の浅原才一(1850~1932)という妙好人がいた(日本的霊性 鈴木大拙 岩波文庫)。彼の「なむあみだぶつの歌」は印象的だ。
「ありがたい、なむあみだぶつ」「あさましい、なむあみだぶつ」「でいりのいきが、なむあみだぶつ」、と下駄の鉋屑に書きつけていた。
大拙和尚は「曰く、才一が南無阿弥陀仏そのもの」だと説明する。彼の意識が念仏に全く占領されたのではなく、彼の主体が南無阿弥陀仏そのものなのだ、と。

「キリストが、死んだ人にも生きている人にも主となられる(14:9)」とは、才一のごとくに、キリストが私の主体そのものであること。私が自分を抑えてキリストに明け渡すのではない、キリストと私の領域を調整し合うのでもない。私にとってキリストが主であることが本来の、私の自然な、私にとって過不足のない、私自身なのだ。なぜならば「生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のもの(14:8)」だから。祈る私として、試みて手痛い目に遭う私として、キリストがいまし給う。

浅原才一は自分のあさましさとして南無阿弥陀仏を唱え、私たちも欠け多いまま、罪人として、キリスト〝を〟祈る。才一はひと呼吸ごとに念仏し、私たちも吸う息(霊)で聖霊を迎え、吐く息で己が罪を手放していく。
人生には、苦しいことも痛むことも少なくないが、それはキリストの痛みそれ自体なのだ。逆に言えば、キリストが御身を傷つけてまで、私たちの痛みを負って下さっている。
だが、間違えないでほしい。キリストと一つだからといって、教会の「制服」を自己規制して着てしまっては神の大いなる創造に背く。
キリストによって私は私にむかい、あなたはあなた自身になる。多様な共生を象徴する虹色の旗「LGBT」も、神の創造の豊かさ。人間の覇権を主が打ち壊し(創世 11:7)、「主がそこで全地の言葉を混乱(ﾊﾞﾗﾙ)させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたから(11:9)」。

「わたしは絶えず主に相対している。主は右にいまし、わたしは揺らぐことがない(詩編 16:8)」。キリストと一つなる私は、私自身になることに揺らがない。そしてキリストと共に永遠に在る(16:10)。

★

≪おまけのひとこと≫
私の喜びはキリストの喜びなのだが　利己的な喜びに忙しくてキリストを感じにくい　私の痛みがキリストの痛みであることは感じやすい　痛む私は孤独で　孤独と共にキリストは生き　共に死ぬ